

管啓次郎さん×清岡智比古さんトークショー 「uと読みたい？Qトな本たち！」全文版

■クセジュの魅力

管啓次郎 白水社のuブックスと文庫クセジュには、学生の頃から大変にお世話になってきました。とくにクセジュは、フランスの出版社が出しているシリーズで、日本語で暮らしている私たちには思い及ばないような、様々な地域や主題のものが数多く刊行されています。

しかもあるテーマの本について、年月が経つと、全く別の著者が異なった立場から同じタイトルで本を出している。いわば非常に長い百科事典のエントリーが更新されていくという仕掛けを持ったシリーズです。

清岡さんをご存知のとおりフランス語のカリスマ教師ですが、僕は学生の頃にはフランス語を専攻したんですけれども、その後だんだん遠ざかってしまいました。それでも明治大学では一時期フランス語を担当していました。

今回は話のきっかけとして、フランス語をやることによってはじめて見えて来る世界のようなものが、とぼ口になるのではと思うのですが、どうでしょうか、清岡さん。

清岡智比古 珍しくいっぱい喋りましたね(笑)。

管 そう、たいがいは一言、二言ですからね。

清岡 管さんのお話どおり、クセジュに入っているような本は、日本では出ません。日本ではそういう視点でものを見ていないので、作りようがない。翻訳シリーズなので、全部が全部、読みやすいわけではなけれど、極論すれば、本を買って、目次を見て、拾い読みして、「ああ、こういう立場からものを捉えるような考え方があるんだ」ということを知るだけでもいい。

フランス人が書いたものを日本人である私たちが読むと、知識のバックグラウンドが違うので、すらすらと分からないところもあります。でも、そこは飛ばして、分かるところを繋ぐだけでも、新しい見え方が得られる。

海外のタイトルを眺め、読んでいくことによって視点が多層的になり、世界の見え方も豊かになるのではないのでしょうか。真面目すぎるかな？

管 目録を見るだけでも、不思議なタイトルがたくさん出てくるんですよ。ラテンアメリカ、アフリカ関係の充実は当然としても、例えばヨーロッパの地域でも『チェコスロバキア史』などは「おっ」と思う。『森林の歴史』なども主題的に大変興味深い。

あるいはアフリカのニジェールについての本。『フランス系カナダ』などは日本の新書では絶対にありえませんよね。こんな風に細かいトピックを追っていくのに便利で、思ってもみなかった見方や、地域についての着目の仕方を教えられます。

■フランス語とフランス語圏（フランコフォニー）

フランコフォニーとは

管 フランス語をめぐる環境は、僕らが学生だった1970年代から大きく変わっています。この30

年くらいの中に、英語に対する一極集中が世界中で進行してきて、英語さえ知っていれば何でも分かるような風潮が強くなってきたことは否めない。

これに対抗するかのようフランス語は、19世紀から20世紀にかけての大言語としての威信をかけて、フランス語圏の統一性を主張しはじめた。これがフランコフォニーというある種の文化的な政策で、当然その背景に経済的な動機を孕んだものです。

僕らが学生の頃は、まだフランス文学を通して人間の真実を学ぶ、人間の心の動きを学ぶ、そんな幻想を持ってフランス文学を勉強するということが出来ましたが、その後は、段々、皆の人間の心理そのものに対する興味が薄れてきたのか、色んな意味で文学自体が追いつめられ、比例するようにしてフランス語の立場も、教育機関の中でも力を弱くしていった気がします。

その「フランス語圏の魅力」についてですが、清岡さんも本国だけじゃなく、それ以外の地域についても興味を持っていらっしゃいますよね？ ね？（笑）

清岡 寝てないですよ（笑）起きてますけど、管さんの話の中でポイントがいくつかあったから、これについて話そうと思ってたら、最後また別のテーマが出て来て困ってます（笑）。

管 それではまずはフランス語圏についての話をさらっとしてみるの、どうでしょう？

フランス語話者の中で、フランス人は3分の1しかいない

清岡 えっと、今日はご来場いただきありがとうございます。ただ、これだけの人数がいらっしゃると、みなさんのフランスに対する興味や考えは様々だと思います。まずは、共有してあるであろう認識を、確認するようにお話します。管さんと私は同い年で、確かに1970年代～1980年代にかけて大学生だった頃は、まだフランス文学に対する神話みたいなものがありました。遡って私の親の世代になると、文学だけでなく、映画や音楽に対する信仰のようなものもあった。たとえば映画では『舞踏会の手帖』。音楽ではピアフや、グレコです。

ちなみに私は『旅路の果て』という映画が好きでした。ルイ・ジューベという俳優が、老人ホームみたいなところで暮らす、落ちぶれた役者を演じてます。そいつは女にモテるということがアイデンティティで、常に彼のところには若い女から定期的にラブレターが来る。ところが、最後、それは自分で書いているということが分かる。ドラマツルギーとしても、閉ざされた空間の中に色んな人が入って、出会いがあって。そのような目で見ても分析できるし、面白いと思っていた時期はあるんです。また、大学生の頃はボードレルなど、いわゆるフランス文学を心から「素晴らしいな」と思っていました。しかし、理由はさておき、現在ではその神話を100%信じるということが出来なくなりました。

そんな中フランコフォニーという捉え方に触れたのです。

私が出演しているNHKラジオのフランス語講座では、主人公は日本人で、お相手はカナダ人。その上司はニューカレドニア出身です。要するにフランス人はあまり出て来ない。

フランス人が出て来ないフランス語講座、不思議かもしれませんが、意図的なのです。週に1回「今週の1曲」として音楽を流していますが、全24週の放送でも、フランス人の曲は実は1回しか流れません。カナダやマリ、コートジボワール、アルジェリアなどの、フランス以外の「フランス語圏」の曲を集めているからです。

要するに、私がフランコフォニーについて思っていることを形象化しているんです。

今、フランス語話者の中で、フランス人は3分の1しかいません。英語でもいわゆるインターナショナル・イングリッシュを話している人は、アメリカ人+イギリス人の数よりも多い。映画や文学の神話が信じられなくなった今、「せっかく勉強したし、それを使って何か新たな方法は

ないか」ということで、ちょっとやってみたら面白いので、それを反映できるように工夫しています。

管 なるほどね。それでは現実のフランス語圏への旅について聞かせていただけますか？

清岡 いいですけど、今、私、結構喋ったから、管さんの方からどうぞ（笑）。

フランス語圏への旅

管 僕はね、そもそもフランス本国にさほど興味がなかった。その代わりに、カリブ海の島とか、太平洋の島々などのフランス語圏には早い段階から訪れていました。

とくにポール・ゴーギャンという画家が大好きだったから、タヒチとかマルキーズ諸島には、高校生くらいのときから憧れがありましたね。25歳くらいの頃に一年間、南米を旅行して、しめくくり、ベネズエラのカラスからカリブ海を島伝いにわたり、マルチニーク、グアドループ、ハイチに行きました。はじめてフランス語環境でフランス語を実際に使ったのがマルチニークで、住民の90%以上が黒人の島。

エメ・セゼールというマルチニーク出身の大詩人への興味もあり、それからカリブ海への興味がだんだん加速していった。その後で今度は太平洋のタヒチや、あるいはニューカレドニアにも行きました。

それでね、僕が撮ってきたタヒチの首都パペエテのスライドがありまして、ここでまずみなさんにそれをご覧頂いて、なんとなく和んできたところで、またお話を続けたいと思います。

☆

管 どうもお粗末さまでした。あんまり意味があるような、ないようなものをお見せしましたけど、よかったのかな。僕は色々な場所に行くのがすごく好きです。旅行ではなんといっても、細かいことに色々気がつくのが楽しい。でも、肝心の前提となる知識が無いと、現実になんかに行っても十分楽しめません。

そういうときに、例えばクセジュの『フランス領ポリネシア』。これは僕が訳しましたが、現地を旅した後で改めて自分が訳した本を読み直し、はじめて分かるということもある。自分の体で経験しないと、本当には知識は身につけませんね。

清岡 『フランス領ポリネシア』は、ぼーっと読んでいると頭に入っていないけど、現実のことを思い出しながら読むと結構リアルですよ。私は5~6年前にタヒチに行って……ちょっと待っててね……これこれ、私の家の鍵、管さんのスライドに写ってたビールのトレードマークのキーホルダーをそのときに買って使っています（笑）。商店街を歩いている若い女の子はゴーギャンの絵に出てきそうでした。顔立ちや、黒髪ストレートロングで、前髪がない髪型。「ああ、そうか。ゴーギャンの女の子たちはみんなこの髪型してたな」って思うわけです（笑）

それから、海辺のホテルにいたんですけど、ある日ビーチを歩いてたら音楽が聞こえてきて。休日だったらしくて、3~40人の人たちがそこでパーティみたいに、バーベキューしたりしてた。その人たちはフランス語じゃなかったですね。ホテルの中はフランス語でしたけど。

でもね、みなさん、フランス語をちょっと勉強してタヒチに行くと、日本人がフランス語を話すと思っていないので、すごく驚かれます。パリでフランス語を話していても、別に目立たない

ですけれどね。

あと...マクドナルドに入ったら壁にドナルドの絵が描いてあって、背景が思いっきりタヒチ。すっごい変な感じでした。中国系の人もすごく多いですね。美味しそうな店は中国系なんだけど、なんとなく日本人は入りにくい雰囲気でしたね。

管 そう？ 僕はだいたい世界中どこに行っても中国系の店しか入らないから。

清岡 管さんとどこかに行ったときに、普通に現地語で話しかけられてましたね。

管 それはどこに行ってもそうですね。日焼けするたちだから、ハワイなんか行くと2日くらいで真っ黒になる。そうするとだいたいフィリピン系の人だと思われて、そのように扱われますね。

■クレオール化ということ

モンテリオールでの共同研究

管 清岡さんはフランス語圏の土地で特に思い出に残る場所というのは？

清岡 去年の今頃に管さんが中心になっている共同研究でモンテリオールに...

管 ああ、なんかありましたね。

清岡 あります。現在形ですよ（笑）。現在、管さんと共同研究をやっています。我々に加えて中国・台湾が専門の先生と、アメリカ西部が専門の若い先生と、倉石信乃さん。倉石さんはつい最近『スナップショット』というタイトルの写真評論集を出して、表紙に「SNAPSHOT」という文字が薄い色で重ねてあって、ぱっと見「SMAP」に見える（笑）。でも、写真論としては最前線の人なんで、面白いです。

大げさに言うと専門が違う人が集まって同じテーマでものを見て、持ち寄ったら面白いんじゃないかという研究です。その同じテーマっていうのが何でしたっけ？

管 文化の...、今更あまり口にしたくない言葉なんですけど、「クレオール化」という言葉がありますよね。僕は、ずっと昔から使っているのですが、要するに2つ以上の文化が混じり合って、そこで即興的に編み出されたものがだんだんはっきりとした形をとるようになり、子どもたちに受け継がれる。そのメカニズムをさす言葉です。文化混淆の一般的な論理みたいなものを探れるのではないかと考えて始めた共同研究ですが、あまりにも地域も専門も別々で、結構難航しています。

清岡 そうですか、僕は面白いと思っていますよ。

管 うん。でも、確実にみんなを繋ぐことができるのは、どこかに行って、旅行の体験を書く。これについては全員が一度はやることにして、まあ、着実に進行していると言っても過言ではないですね。

清岡 そうなんです。今、管さんはすごくさりとおっしゃいましたが、クレオールというのはもともと言葉に使っていた用語です。2つの言葉が商売上、混じり合ううちに、生まれた時から混じり合った言葉を使う世代が出来て、システム化される。その言葉をクレオールと言いますが、そのクレオールという言葉は文化の面でも使ったらどうか、ということです。色んなところで混じり合うものとしての文化。

やっぱり歴史のことが分かった方がいい

清岡 それで、モンリオールのことをちょっと喋っていいですか？

基礎知識として、カナダは日本の24倍の大きさ。モンリオールはケベック州にあって、ケベック州は日本の4倍くらいの大きさで、結構大きい都市です。モンリオールは、フランス語を母語とする人が半分、英語を母語とする人が約2割。残りはどちらでもない。その「どちらでもない」人も、大抵はフランス語か英語のどちらかが話せて、英語とフランス語のバイリンガルが6割くらいという街です。こっちは英語、あっちフランス語が聞こえるような街です。

すごく真面目な話になってしまうんですけど、いいですか？この頃ね、歳のせいかもしれないけれども、やっぱり歴史のことが分かった方がいいんじゃないかって、思うんですね。

管 それは絶対にそうでしょう。

清岡 例えばクセジュの『お風呂の歴史』。ギリシャ・ローマあたりから、19世紀くらいまでの話ですが、庶民がくつろぐ蒸気風呂、マリー・アントワネットの浴槽サロン、セーヌに浮かぶ船上水浴施設、などが出て来る。快楽と禁欲の間でゆれる人々。ね、面白そうでしょ。

お風呂って言うと、やっぱりカラカラ浴場とか、ポンペイの遺跡とかじゃないですか。ポンペイのベスビオ火山が爆発したのが、紀元79年。ローマ帝国の中の一都市だったポンペイにはお風呂、酒場も、図書館も売春宿もあって、すごく整備された街。

だから、ローマ帝国の街って言うと、僕のイメージとして浮かぶのはポンペイなんです。話がすごく外れてますけど（笑）。

また、7世紀からたった150年の間に一気にイスラムが広がって、イスラム帝国が出来上がり、13世紀まで続く。7世紀にイスラムとキリスト教の対立がはじまっているわけだから、9.11のことを考えようと思ったらそこまで戻らないといけないわけですよ。

ヨーロッパについて考えようとする、学生なんかにも話すんだけど、例えばフランスならばフランス革命は避けて通れないし、革命以前の王制のことを考えると大航海時代というか、植民地主義のはじまりまでは遡らないと話にならない。

つまり、例えば今「どこかに行って何か見て来る」と言いましたが、行って、見て、何かを本気で調べはじめたら、絶対にかなり遡らなきゃいけないわけです。

だから、例えばモンリオールのノートルダム寺院をいつ、誰が、どういう意図で作って、なんでそうなったのかを考えると、植民地主義のあたりまでは戻らないとどうしようもない。

僕も、昔はとりあえずフランス革命のどこまで戻ればいいのかと思ってましたが、ちゃんとやるなら、もう1つか2つ前まで戻らないとだめだという気がしてきた。ずっと歴史は好きではなくて「昨日のこと？」「振り返らないタイプだぜ」みたいに思ってたんだけど（笑）。

でも、どうも振り返らないといけないんじゃないかな、と思う昨今ですね。

管 そう。どこに行っても、知識がなかったら何も見ていないに等しい。だって目の前にあるも

のの意味が全く分からないわけだから。そうは言っても旅の時間は限られてるし、知識を身につける時間も限られているから、仕方がないのだけど。

清岡 単純にヨーロッパ主義の中で考えるとしても、例えば美術館に行っても、聖書とギリシア神話が分からないと、絵を見ても分からない。これがギリシア神話のどの神話のどの瞬間かを知らないと意味がまったく分からないわけです。

100年前から言われていることですが、ヨーロッパはギリシア・ローマとキリスト教で出来ているわけです。だから、2つが分からないと理解出来ないというのは、当たり前と言えば当たり前。そして、それを世界に広げると、イスラムやアフリカのことが分からないと、ヨーロッパが相対化されない。

モンテリオールの歴史を知る

清岡 モンテリオールについて、最近気に入っている話があって。種子島の鉄砲伝来が、1543年で、フランス人がモンテリオールに到着するのがその10年前くらい（1535年）なんです。だから、それが覚えやすいんじゃないの？ って学生に言うんですよ。

つまり、ポルトガル人がはるばる船に乗って種子島まで来ると、フランス人が船に乗ってモンテリオールまで来る時期が10年くらいしか違わない。さて、何故わざわざこんなに遠いところまで来たのか？

ポルトガル人は、わざわざ鉄砲を伝えに来たんじゃないわけですよ。隙あらば占領しようと思って来るわけですよ。だけど、どうも上手くいかないの、急に変えて「鉄砲買わない？」って言ったんですよ。親切で伝えに来たはずがない。

そう考えると、モンテリオールとフランスも同じ文脈です。それで新（ヌーベル）フランスなんかを作って—細かいところは飛ばしますが—フランス人が入植したけれど、イギリスも植民地活動をはじめ。ヨーロッパでもアメリカ大陸でも英仏が戦った。そして、フランス革命よりちょっと前に、フランスが負け、植民地をイギリスにほとんど取られちゃう。

戦勝国のイギリスでは産業革命が起こります。広い植民地を背景に、材料も持って来られるし、売りつける場所もある。だから、どうしてフランスで産業革命が起こらなかったかって言うと、要するにその戦争に負けたからだという話になるのね。

モンテリオールに話を戻すと、そういうわけでイギリスの植民地になっちゃった、と。だけど、とある理由のもとに、イギリスはフランス系住民に対してフランス語もカトリック信仰も禁止しなかった。要するに、アメリカの独立戦争で忙しくて、そちらの面倒まで見ていられなかったのです。

そのおかげで、今のモンテリオールがあるわけです。当時のイギリス次第では、今のモンテリオールはないわけですよ。そんなこと言ったとしたら、もしも第2次世界大戦の後、GHQが日本語の使用を禁止したならば、日本もそうになっていたかもしれない。

そういう、ある種の歴史上の偶然はありますよね。

言語の複雑化とモンテリオール

清岡 日本人にとっては「フランス人」にはいいイメージがあります。でもモンテリオールというか、ケベックでは、支配者層はイギリス人で、占領された非征服者としてのフランス人は、常

に抑圧された存在だった。つまり、いくら勉強しても賢くても偉くなれない。だから、先程言ったノートルダムは、一見、フランス人が先住民を宣教するために建てたのかなと思いきや、時代を調べてみると何のことはない、自分のアイデンティティを守るために作っていたんですね。だから、すごく皮肉な感じがします。

そして、1960年代の「静かな革命」で、教育制度とか色んなものを改革した。それは、おそらくキリスト教から離れるということが「革命」だったんだと思うんだよね。フランス革命もそうだったように、今で言う、ライシテ（政教分離）の問題と似ていて、権力と宗教を離すというところで革命という言葉になったと思うんですよ。1960年ですから、だいぶ遅いですよね。

その後、フランス語憲章みたいなものが出来た。それは、キリスト教的なアイデンティティが失われた代わりに、言語的なアイデンティティをあげるよというので、フランス語を公用語とする。それで、ハイチとか、アフリカ系のフランス語を話せる移民の人たちが急激に増えるわけですよ。一見、フランス語推進派にとってはいいことに見える。

では例えば、ハイチ出身の人たちがモントリオールに来て、フランス語を習得したからといって、彼らがハイチクレオール語を捨てるか？と言ったら、捨てないわけですね。フランス語はできるけど、彼らは自分の母語を捨てない。すると言語がものすごく複雑になる。フランス語は、内部から浸食されるような形になるわけですね。

モントリオールは英語話者と、フランス語話者、2つの極があります。だから、他に弱小言語がいっぱいあっても、吸収されないんですよ。これは真田桂子さんなんかも言われています。

つまり、核が1個つしかない、マイノリティは吸収され同化される強制力が働くけど、極が2つあると牽制力が働いてクレオール語が、色んな言語が残るんです。その複雑化した状況が、モントリオールなのではないかと思っているのですよ。

管 なるほど。今のお話で、われわれの共同研究の成功を確信しました！

クレオールというのはニュートラルな言葉ではない

清岡 でしょ！ そうなんです。例えば、余計なことですけど、今のラジオ講座の、9月にかけて「今週の1曲」、アンボスという、モントリオールのハイチ系移民の曲をかけます。ここでね、ひとつ思いつくのはディアスポラって言葉。

管 もともとユダヤ人の離散集団のことでしたね。

清岡 そうです。ただこの頃は、このディアスポラそのものがフィクションだ、という話もありますけど。それはともかく、この言葉が最近では比喩的に使われるようになって、「元いた人たちが離散する」ことにもディアスポラという言葉を使うようになったんですね。

要するに、奴隷として連れて行かれるのもある種のディアスポラ。ハイチにはもともと先住民がいたわけですよ。

だけど、最初コロンブスが来て、スペイン人の入植者が来て、簡単に言うと先住民を皆殺しにしました。NHKの原稿に「皆殺しにしました」って書いたらチェックが入って、「すみません、皆殺しは止めてください」（笑）。そりゃそうですね。だから「滅ぼされた」にしました。

その後フランスがやってきて、ちょっとこっち側を俺によこせ、って取っちゃって、それが現在のハイチに繋がっていく。先住民がいなくなったハイチに、アフリカから黒人を奴隷として

連れてきちゃったので、先住民がいないの。大地震の報道写真を見たら、全員黒人でしたよね？不思議に思いませんか？ 要するに、あれは全員連れて来られた人の子孫。

だから、ハイチにいる黒人はディアスポラの一つの形としてあそこにいるわけです。

で、さっきのモンリオールのハイチ系移民の歌手・アンボスは、ディアスポラになった後に、モンリオールに行っているわけですね。これを一応セカンド・ディアスポラという風に言うこともできる。これは管さんが言う方がずっといいんだけど、移動というような視点で世界を眺めるときには、この「ディアスポラ」のような言葉が一つのキーワードになるんじゃないでしょうか。

だから、共同研究でもクレオールやポストコロニアリズム、ディアスポラという言葉が共同スタンスになる。

ただ、補足しておく、クレオールは文化が混じり合うことと言ったけれど、例えば日本が台湾を侵略したことで、日本の文化と台湾の文化が混じり合った文化が出来たとしますよね。それを私たち日本人の研究者が行って、「お、これはクレオールだね」と言ったとします。そんなの、現地の人にとっては、「お前が言うな」ですよ。

だから中国の担当の人は、クレオールって言葉は使いたくない。クレオールなんて言えない立場なんです。ハイチの話をしていると、すごくニュートラルで客観的な話のような気がするけれど、歴史の中で日本の過去を見直すと、あまりお気楽にそういうことも言えない。だから、言葉遣いというのは、その辺でとても難しいですよ。

あと、ルワンダやアルジェリア、ハイチ、レバノン。いろんな国の歌手が、モンリオールにいます。だから、ただ単に一つの都市を旅行しているだけでなく、そういう人たちがいることを知っていれば、ルワンダやハイチのことも意識しながら旅行ができる。

予習して、空間的な移動の問題と、時間的な深まりの問題、つまり縦と横を合わせて考えられれば、その旅行にも、もっと意義が生まれるんですよ。

管 さっきの話をちょっと補足すると、クレオールっていう言葉はね、客観的で、価値から中立的な言葉じゃないんですよ。そうじゃなくて、文化がぶつかり合うときは必ず力関係があって、その歴史的な文脈の中で、一方にとっては混じり合うことを強制されるという側面が必ずある。だから、台湾に関してクレオールという言葉を使わないというのは、それはもちろんいいんだけど、ちょっと誤解があるような気がしますね。

清岡 なるほど。

離れた時代、離れた土地、似た構図

管 あたりまえのことだけど、どの土地も個別で特異な歴史を持っています。同時に、まったくかけ離れた時代や土地に、よく似た状況や構図が生じることもある。その部分に着目してゆくのには研究として意味があると思います。

今の清岡さんの話で面白かったのは、モンリオールはフランス語圏だとは言っても、英語とフランス語の間に明らかに力関係があって、フランス語の人たちには「自分たちは二級の市民だ」という意識がある。これは、フランス語で書いているケベック、モンリオールの作家達が、アメリカ南部のプアー・ホワイトや黒人たちの文化、カリブ海の黒人たちの文化に強い親近感を持っている1つの理由になっていますね。

そして、カリブ海の作家たちも、モンリオールのフランス語の作家たちには、白人の作家であつても自分たちと共通する部分があるということを理解しています。

僕がこれまで実際に出会ってきたモンリオールの方は、なぜか全員、移民の子どもばかりなんです。たとえばこの春まで僕の学生だったパコは、中米系のカナダ人で、家ではスペイン語を喋って、学校教育はフランス語で受けていた。僕が学生時代に友達だったギリシア系の姉妹はギリシアからの移民で、モンリオールで育ち、アメリカ南部に留学していました。

だから、清岡さんが上手に説明してくれたとおり、モンリオールが英語とフランス語だけの街かという、それは表面上のこと。あくまでもその背後にもすごく色々な言語とか、色々な背景の人たちが集っている。実際に今、世界の大都市はどこでもそうなりつつあります。

清岡 パコは、1984年生まれです。モンリオールのパコの家にも行きました。パコのご両親はグアテマラから1982年に移住した。つまりパコはモンリオールに来て2年後に生まれたわけです。あ、パコは、フランシスコの略です。フランシスコを短くするとパコ。だから、あの有名な宣教師はパコ・ザビエル（笑）。

パコの家は面白くて、お父さんはフランシスコで息子もフランシスコなんです。お母さんがマリーベルで、妹もマリーベル。つまり親子が両方とも同じ名前なんです。わざと同じにしたんですって。お父さんがパコなんで、区別のために小さい頃はパキートって呼ばれてたみたいです。

パコは、ご両親から「グアテマラがどんなに大変だったか」という話を聞くわけだけど、彼自身はグアテマラの事情はよく知らない。グアテマラには所得税がありません。所得税も累進課税も無いから、いわゆ金持ちの地主に有利なんです。

だから、金持ちはいつまで経っても、どんどん金が入るし、労働者たちはどんなに働いても金持ちになれない。もうグアテマラに居てもダメだから、移民するわけですね。

グアテマラの公用語はスペイン語なので、グアテマラ人のパコのお父さんは、当然フランス語はわからない。でも、兄弟がいたからモンリオールに来て、皿洗いをしながらフランス語学校に通って覚えた。それで小さい家を買って、家族を呼び寄せて、今に至ります。

でも、1982年に移民してきて日本に留学するような子どもを育てられるんだから、上手く行った方ですね.....って、これ、予定した話のまだ3分の1も行っていないですね。

■二人が選ぶ、「文庫クセジュ」ベスト3

クセジュの1冊目『コルシカ島』

管 ちょっと本のお話をしましょうか。

清岡 白水社さんが覗んでいるので（笑）。

管 今日のひとつの大きなテーマは、フランス語を窓にしたときに、世界は実は多言語・多文化で、ものすごく複雑に混じり合っていて、それが当たり前になっている場所だ、というのが見えて来るんじゃないかっていうことでした。今までのところで清岡さんがそれを大変に上手に話してくれたと思います。

そして、予定ではその文庫クセジュおよびuブックスからそれぞれが3冊ずつ選んで来て、紹介するつもりだったんです。ポケモンカードみたいにぶつけ合って。

清岡 ポケモンカードなんですか！（笑）

管 やろうかなって話だったんですけど、どうでしょう？

清岡 簡単にやってみましょうか。

これ、たまたま2人とも選んだのが、『コルシカ島』なんですね。

管 ぶつかっちゃった。僕はコルシカに、なんとなくずっと興味があったんですよ。イタリアのすぐ側にありながらもフランス領だっていうのが、どうも変な場所だなと思って。

清岡 コルシカ島の場所、みなさん分かりますよね？ 学生だと全然分かんないからね。

管 まあ、タヒチとハイチの区別がなかなかつかないから（笑）。コルシカと、すぐ下にサルデーニャっていう島があって、この2つは一度は行ってみたいところです。それでこの本を読んでもみました。そうしたら、歴史と地理についてのかなり詳しい記述がある本で、一度読んだからと言ってすぐに飲み込めるようなものじゃない。こっちに受け止めるだけの下地がない。

コルシカ島と聞くと、どのようなイメージがありますか？ 僕はそもそもフランス本土ですら通算でも2週間くらいしかいたことがないから、そこから見えるコルシカ島のイメージが全く分からない。

フランス人にとってコルシカはどういう印象なの？

清岡 僕は全然知らないんですけど、今年はコルシカ島に行こうかなと思ってちょっと勉強したんですよ。付け焼き刃ですが。

『アデュー・フィリピーヌ』っていうヌーヴェルヴァーグの映画がありまして、「さよならフィリピン娘」という意味なんですけど別にフィリピン娘は出て来なくて、ゲームの名前なんですね。1962年の映画で、ゴダールも絶賛したらしい。『勝手にしやがれ』と同時代の映画なんです。すごく雑に言うと男1人、女2人の三角関係の話。

その頃のフランスっていうと、アルジェリア独立戦争中なんですね。1954年から1962年までですね。『シェルブールの雨傘』でも、男に召集令状が来るのは、アルジェリア戦争ですからね。

その男に召集令状が来て、その前にコルシカ島に遊びに行くという設定。映画の後半からコルシカ島が舞台になります。海岸は山がちで石がごろごろ転がっている景色です。

途中で地元のお兄ちゃんがナンパな感じで割り込んで来て、イタリア語で歌を歌ったりすると男が鬱陶しそうな顔をするわけです。コルシカはフランス語圏ですからね。

結局車が故障して、そのお兄ちゃんを置き去りにして3人は逃げちゃうんですね。最初は若者同士の恋愛みたいな感じのものかと思ったけど、勉強して見直すと、フランスとコルシカの関係みたいなのが感じますね。

NHKラジオ講座で一緒に仕事しているレナ・ジュンタさんに、フランス人にとってコルシカはどういう印象なの？って訊いたら、昔は暴力的で怖くて、あまり働かないイメージだったそうです。でも、最近はリゾート地というイメージもついてきたそうですが。

コルシカは、最初はローマ帝国に支配される。その後、イスラムとか海賊とかの攻撃を受けながら、都市国家だったピサやジェノバの支配下に。ジェノバに支配された時代が長かったので、文化的には基本的にイタリア文化圏に入っているわけですね。コルシカ語は、言語的にはイタリア語の方言のような分類になっているんです。

それで、独立運動が起きたときに、ジェノバがフランスに助けを求めます。フランスは、駐留していいなら助けてやるよって感じで駐留して、結局そのままコルシカ島をフランスに併合しちゃった。それが1768年とか69年あたり、つまりフランス革命の20年くらい前のこと。ちょうどその頃にナポレオンが生まれるわけです。

「なんかちょっとあいつら世話がかかるぜ」

コルシカというとナポレオンで、ついでに言えば、ナポレオンはフランスではちょっとアンビバレントな存在。歴史上一番人気がある英雄なんだけど、コルシカからやってきてフランスを奪い取った者（l'Usurpateur）という貶められ方もします。だから、ナポレオンが持っている二面性というのは、フランス人がコルシカに持っているイメージに多少影響してるはずなんですね。

ただ、細かいことと言えば、レティシア・カスタっていうモデルさん知ってます？ 30代のきれいなモデルさんで、フランスで人気があるんですけど、その人がコルシカ出身なので、ぐっとイメージがよくなったという話ですね。

それで、ドラクロアのフランス革命の絵の女の人がマリアヌヌでしょ。アメリカにあげた自由の女神もマリアヌヌですよ。フランスでは、何年かに1度「ミス・マリアヌヌ」っていうのが決まるんですよ。第3回のマリアヌヌがカトリーヌ・ドヌーブ。レティシア・カスタは数年前のマリアヌヌ。そういう風にフランスでコルシカの女性が有名になったら、コルシカのイメージがよくなることもある。

何も知らなくても、情報を集めていくとそれなりに面白い。ただ、1998年に、コルシカでは知事が独立運動の人たちに殺されています。そういう事件があると、やっぱり怖いんじゃないかと思われる。

フランスでは、知事は選挙ではなくて中央が派遣するんです。知事は国家の手先そのものなわけですよ。それを殺すっていうのは象徴的な意味がある。あるいは、有名人がコルシカ島に土地を買って別荘を建てようとする、たいてい建ててる途中で爆破されるとかね。

だからと言って、コルシカの人がみんな独立を望んでいるわけじゃなくて、統計でいくと独立を望んでいる人は10%もないくらいです。

フランス人にすれば、コルシカは本国に比べると経済的に弱いのに、共和国の中では同じ水準の生活をさせるという建前があるので税金を多めに投入してるわけだから「なんかちょっとあいつら世話がかかるぜ」みたいな感じがちょっとあるんです。

ちなみに、ベルギーのフランス語話者も同じような立場。オランダ語話者の方が経済力が強いから、「同じ税金払っているのに、フランス語の奴らは働かず税金ばかり使って、あれなら独立してくれた方がいいぜ」とオランダ語話者側は思っている。

ピエノワールと民族運動

管 清岡さんはコルシカだけでも話は尽きませんが、もうちょっとだけこの本について僕からも。僕は細かいところに気を取られるたちなので、読んでいてもこういうところが好きなんです。

例えばね、ベネズエラやプエルトリコ、そこはコルシカ人が定着した典型的な国であって、かつてはベネズエラに6000人もコルシカ人が、小フランスと言われるコロニーを作っていた、って。もう、びっくり。小フランスですよ。

清岡 コルシカ人が？

管 ええ。こういうのが何か笑えて大好きですね。

それから、プエルトリコではコルシカ系の住民が全体の4%を占める。4%って相当な数でしょ。それがプエルトリコというカリブ海のスペイン語の島に行ったというのは、なかなか興味深い。

僕はハワイに住んでいたことがあるんですけども、似たような例で、ハワイにはポルトガル系の人が人口の中に何%かいて、そのハワイでポルトガル人だと思われている人の一定の部分が、元来、アフリカのカーボ・ヴェルデ出身の黒人なんです。そういったことが面白いですね。

清岡 必ずしも繋がらないけれど、今の話で思い出したのが、もう時間がないから要点だけ言いますけれど、引揚者っていう人たちがいますよね。うちの両親も引揚者ですけど、つまり大陸から戦争に負けて引き上げてきた人。で、この引揚者といわゆるピエノワールはかなりパラレルで語れるわけですね。

さっきアルジェリア戦争の話をしましたけれど、アルジェリアを支配していたフランス人を中心とする白人層がいるわけです。その白人層がアルジェリア戦争に負けて本国に戻って来る。そのときには二世、三世になってるんですよ。アルジェリア生まれ、アルジェリア育ちなんですよ。

戦争に負けたからフランスに戻って来るけれど、何の足場もないし、「なんだお前ら」って差別されるわけです。その人たちのことを「ピエノワール」と呼ぶんですけど、彼らにはある種の誇りがあって、自分がピエノワールであることを隠したりはしない。

なんで急にそれを言い出したかということ、アルジェリア戦争が終わったときに、たくさんのピエノワールがコルシカ島に来るんです。

コルシカ島はもともと住民が少ないところに、多くのピエノワールが入ってきて、しかも政府に保護されるんですよ。フランスのためにアルジェリアに行っていたわけだから。そして、農園を経営したりするんですけど、そうするとコルシカの人たちが「島を乗っ取られるんじゃないか？」とビビるわけです。その中で民族運動が高まるという流れもあったようですね。

僕には全く分からないけれど、フランス人に訊くと「典型的なコルシカ人は顔で分かる」って言いますね。ちょっとアラブ系のニュアンスがあるんですね。

今、ふと思い出したことを言ってもいいですか？

いじわるを言うんじゃないですけど、沢尻エリカさんのお母さんはフランス人です。そう聞くといわゆるフランスのイメージがするでしょ。だけど、彼女のお母さんはアルジェリア系なんです。つまり、北アフリカのアマジグ、日本では「ベルベル人」とも呼ばれることが多い民族です。だからアラブ系のニュアンスが入っている顔ですね。

で、お母さんがアルジェリア系フランス人だと聞いたときと、単にフランス人だって聞いたときと、そのときにみなさんの心の中に落差が生じるとすれば、それはある種の偏見があるんですよ。私もそうですけど。やっぱりフランス人という言葉は、まだある種の幻想をまとっているんです。

管 フランス人というのがもともといかに重層的というか、色んな人が集まっているかということが、よく理解されていないから。

清岡 白人の国ってまだ思われていますからね。

管 まだそうでしょうね。でも、2000年以後のワールドカップのチームを見れば全然違う。

清岡 全然違いますよね。ワールドカップの話、しちゃいます？（笑）

管 いやいやいや（笑）。それはあきらめて、どういう本を選んだのか話しましょう。

二人が選ぶ、クセジュの2冊目！

清岡 じゃあ、ワールドカップ繋がりでちょっと考えたのが、『フリーガンの社会学』っていうのがありまして。

管 ずばり一言、お願いします。

清岡 これは要するに、観客と、サポーターと、フリーガンはどう違うかっていう本ですね。ただ、ひとつの都市文明とフリーガンの関係も書いています。

管 僕が選んだ2冊目は『香辛料の世界史』。これはスパイスのお話で、スパイスがいかにか世界史の展開に関わってきたかということが語られています。

これも僕は変なところばかり読んでしまうんですけど、例えば、インドにはマハラジャと呼ばれる豪族がいるでしょ。マハラジャのマハというのは、ラテン語のマグヌスと同じ語源で、ラジャの方はラテン語のレックスと同じ。要するに「大きな王様」という意味なんです。見事にラテン語とサンスクリットが繋がって、マハラジャとマグヌスレックスが繋がっているというのに、なんか感動しましたね。

また、カルダモンというスパイスがありますよね。にんにくのしつこい匂いを消すには、これを噛むのが一番効果があるんですけど。全然知らなかった。だからカルダモンをちょっとポケットにしのばせておくと、にんにくをどれだけ食べても大丈夫。こういう取るに足らない雑学が楽しい。

清岡 この『香辛料の世界史』も面白いと思いますけれど、管さんの『斜線の旅』の最初の方に出てくるサトウキビの話、あれもそんな話でしたよね。『斜線の旅』は面白いです。

管 ありがとうございます。読めば暗い気持ちになる本ですけど（笑）。

二人が選ぶ、クセジュの3冊目！

清岡 3冊目は、この『海賊』という本。歴史の中で、海賊が襲って来る時期っていうのがあるんですね。今だったらソマリア周辺が騒がしい。塩野七生さんが『ローマ亡き後の地中海世界』という本を書いていて、それは結局海賊の話なんです。要するに海賊がどれだけ重要だったかということですね。

さっき植民地帝国の話をしてきましたが、海賊と国の手先は紙一重です。船というハードの開発もありますが、船を襲って、略奪を繰り返している連中が、あるとき国からの証明書をもらった瞬間に、もう国のお墨付きになってしまう。

それでイギリス、フランス、スペインの植民地争奪のなかで、海賊がどんな役割を果たしたかという話があります。読みやすくはありませんが、史実の表舞台にあらわれない海の上の

出来事、その空白を埋めるのにいい本だと思います。

管 ああ、なんかフリーガンとか海賊とか、そういう連中が好きなんだ（笑）。
僕はジブシー系の音楽が好きなんです。それで3冊目は『ジブシー』。

ジブシーといえば、北インドに起源のある民族がユーラシア大陸を遠く西の方まで行って、各地に散らばって移動生活を続けているようなイメージで捉えられがちですが、この本によると、あちらこちらの社会に多様な形で、マージナルな位置におかれた人たちがジブシーと呼ばれていて、決して民族の話には還元できないということがはっきりと語られています。

面白いと思ったのは、「カロー」という言葉の由来です。僕はアメリカとメキシコの国境地帯にわりと長く住んでいましたが、メキシコ系アメリカ人たちのギャングが使う言葉を「カロー」と言うんですよ。

スペインのチカーノ、つまりジブシーたちがカローという言葉で指しているのは、黒人のことなんです。つまり黒人に対する差別語がカローであり、もともとそこから来て、今のメキシコ系のギャングたちの、隠語がたくさん入った言葉がカローと呼ばれることが分かった。

それから、メキシコでグリーンゴといったら、アメリカの白人を馬鹿にして呼ぶ言い方なんです。これも色んな語源がありまして、例えばアメリカのドルがグリーンのインクで印刷されているので、グリーンのお金を使う奴らという意味でグリーンゴだ、というのが一番広く知られている説でしたが、この本によると、プロヴァンス語の「グレゴ」という言葉があり、これは「悪魔」を指す。これがひょっとしたらメキシコに繋がって行って、メキシコでグリーンゴと言ったらアメリカ白人を指して、悪魔と呼んでいるのかな、と思い当たりました。こんな風に小さな発見がいくらかもあるのが、このシリーズの非常に嬉しいところですね。

清岡 あ、そうだ。ベスト3に入れなくて大変申し訳なかったですけど、管さんが翻訳をしている『闘牛への招待』という本がありますよね。これもやっぱり日本では出ない本ですよ。ピカソの孫が書いた本（『マイ・グランパ、ピカソ』）は、ピカソがいかに嫌なヤツかを書いた本です（笑）。

いや、みなさんね、もう本当に人間じゃないですよ、ピカソ。だって、付き合った女たち、いっぱいいるでしょう？ ほとんどみんな頭おかしくなってるじゃないですか。

どれだけ怪物かっていうことですよ。孫や何かに対しても怪物なんです。その孫がね、たまたまピカソと一緒に闘牛に行く場面があるんです。本当にピカソが興奮してるんですけど、ピカソも興奮した闘牛ってこんななんだからって思ったことがあって、それを思い出しましたね。

■二人が選ぶ、「uブックス」ベスト3

uブックスの1冊目！

管 それでクセジュが終わって、次はuブックスですね。

清岡 Uブックスはね、いっぱいあるんですよ。まずは堀江敏幸さんが訳した『踏みはずし』という小説。組みもゆったりしていて短いから、急いで読んだらすぐに読めますが味わって読みたい箇所も多い。

「財界の大物のスキャンダルをつかんだジャーナリストの前に暗殺者が現れた。だが、歴史書を愛読し、哲学的なセリフを口にする殺し屋はうんぬん」で、とにかく面白いですよ。

ただ、最初の10ページだけが読みづらい。そこを乗り越えれば、後は面白いし、かなりエロチックな場面もある。こんなにエロチックな話なのかって最初びっくりしました。

別にそのエロチックなところがいいんじゃないですよ。いや、そこもいいんですけど（笑）。

一応、私、普段はあまり言いませんけど、英米のミステリーも結構読みます。そこそこミステリーを読んで来た目から見ても、ミステリーの雰囲気はすごく湛えていて面白いと思いました。

管 ブランショは関係ないんだ？

清岡 関係ないんです。ブランショの同じタイトルの本がありますが、ブランショじゃなくて別のものを踏まえているようですね。あとがきで書かれています。

管 では、こっちは堀江敏幸さんの記念すべき第1作、『郊外へ』。

清岡 堀江さん、大人気ですね。

管 特別な存在なので。というのは、僕は2000年に明治大学理工学部に着任しましたが、当時堀江さんは明治の先輩教員で、翌年に芥川賞を受賞していきなり雲の上の人になっちゃったけれど、それまでは普通の同僚でした。

堀江さんが4年くらい前に早稲田大学に移ることになり、つなぎとして僕が理工学部のフランス語の運営を1年間やりましたが、とても勤まらないので来てもらったのが清岡さんです。我々の人生がこの人を媒介者としていかに変わったことか。しみります。

清岡 荷物持ちとして呼ばれたのが、僕なんです（笑）

管 『郊外へ』は、大変に瑞々しい文章で、パリの郊外についてのノンフィクションとも小説ともつかない話がかかれています。その文章を味わうためだけでも、大変にいいですね。もうこの段階ですでにその文体にはゆるぎないものがありますね。

清岡 プライベートついでに言いますと、堀江さんは当時パリ帰りで、これを雑誌『ふらんす』に連載しました。連載時、彼は東京工業大学の助教授だったのですが、私も同時期に非常勤講師として東工大にいて、そして杉山利恵子先生もいらした。よく堀江さんと話をしました。彼はミステリーもすごく読んでいるんです。

アメリカのローレンス・ブロックの話なんかで結構盛り上がった。

管 内輪の話になっちゃいましたけど、でも、なかなか、歴史ですね。2冊目はどうなりました？

uブックスの2冊目！

清岡 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』です。私のはじめて読んだのは中三のときで、よく分からないまま何か新鮮な感じを受けました。同じ本を繰り返し読まない方なんですけど、繰り返し読んだ数少ない本です。はじめて読んだ英語の本としても、思い出深いです。

ただ、こういう話をしてもいいかな？ 同僚の、若い英語の先生に聞いたら「面白くない」っ

て言うんですね。「なんで」と問うと、「ポストモダン小説を読んだ後だったので、技巧的に物足りないと思っちゃいました」って。でも、キャッチャーが書かれたのは1951年なので、ポストモダンじゃないですよ、全然。

雑な言い方をしましたが、ポストモダンの場合は、内容や感動よりも技巧的な面に工夫をこらしたものになっているわけです。でも、シュルレアリスムの、アラゴンの小説だってポストモダンのですよ。1920年代の小説ですが、たとえば『文体論』という小説は、第1章は普通なんですけど、第2章はペンが「なんでこんなことを書きちまったんだろう」みたいに語るんです。だからポストモダンって言っても、そういう意味では驚かないよ、という気がしないでもないです。

つまり、キャッチャーがいかに面白いかということが上手く語れないんです。一応、青春の書なので、青春の書というのは上手く語れないことになっているので、上手く語れないわけです。

ちなみにそのときは「好きなものを研究対象にしていいかどうか」っていうようなことで盛り上がりました。彼は若手なのでクール。「好きなものは研究対象にしてはいけない。自分が上から語れるものを研究対象にしろ」と。「好きなものを読んで学んだら、学んだことを使って、切り分けられるものを対象にするのが研究ですよ、清岡さん」って言われちゃった(笑)。

それで、私ともう一人のロートル派は「いや、研究は愛だ」って言ったんですね。「愛のないところには何も無い」って言って、対立して終わったんですけれど。どうでしょう？

管 いやー、それはちょっと異論が大いにありますね。

清岡 ですよ。要するに文学研究とか批評における愛の位置づけというのが、キャッチャーから浮かび上がる問題のひとつですね。

管 僕もサリンジャーについては話せば色々あるんだけど、あえて入らずに、2冊目に行きましょう。

沼野充義さんの『屋根の上のバイリンガル』です。

沼野さんが若い頃に、ハーバード大学のスラブ語学科に留学されていたときの、ある意味留学体験記でもありますね。当時『翻訳の世界』という意欲的な雑誌があって、それに連載されていた言語の話題をめぐる色んなエッセイが集められています。ロシア・ポーランド文学専攻であるにも関わらず、ロシアには行かずにアメリカ東海岸のロシア・ポーランド人のコミュニティの中に入り、そこで言葉を学び、また本を読んでいった。体験自体が非常に面白いんですけども、今や押しも押されぬスラブ文学研究の第一人者である彼の若い頃の姿が、非常にいきいきと想像できます。ちょうど堀江さんの『郊外へ』も30歳頃の作品で、これと並べて読むと面白い。

清岡 面白いですよ。ついでに『生半可な学者』と、3冊続けて読むと面白いかもしれませんね。どれも読みやすいし、ためになる感じですね。

uボックスの3冊目！

清岡 それで僕は今度はアントニオ・タブッキの『インド夜想曲』にしてみました。須賀さん訳のタブッキの小説は何冊かuボックスに入っていて、どれも面白いですが、これはロード小説的に面白い。さっきの『踏みはずし』と『インド夜想曲』は、絶対に面白いと思いますよ。それで、この2冊を読んで両方面白くなかったら、もう私が面白いと言った本は読まない方がいいですね(笑)。

管 タブッキというのは変わった人で、ポルトガル文学者なんですよ。大詩人フェルナンド・ペソアの研究者で。イタリア人であるにも関わらず。奥さんはポルトガル人。

清岡 他の小説だと、舞台がリスボンだったりしますもんね。

管 僕の3冊目は詩人の多田智満子さんの『魂の形について』。これは古今東西の古典の中に現れて来る、魂のイメージをめぐる本で、魂が人によっていかに想像されてきたか、その形について語っている。多田さんというのはもともとエジプトであるとか、ギリシアだとか、各地の神話に非常に興味を持っていらして。確か『饗宴』という同人誌を鷺巣繁男、高橋睦郎、多田智満子の三人でやっていたんじゃないかな？　すごいメンバーですね。ですから日本の現代詩の歴史の中では、一番高踏派というか、ハードな西洋文学の知識がある人たちのグループにいらして。大変に素晴らしい本だと思います。

僕はこういう本を書きたいな、70歳くらいになったら。まあ、将来の夢として。

清岡 すいません、ひとこと言ってもいいですか。今、管さんがご紹介してくれたとおりでなすけれど、たぶん管さんがおっしゃったほど難しくはないですよ。

管 そうそう。ぜんぜん。読みやすい本です。

清岡 内容的にはすごく洗練されていて、学問的にも高級。でも取っ付きやすい本なので、これは推薦できますね。この本を読んですごく印象に残ったのは、オチまでは言いませんけど、心という言葉と心臓という言葉は「心」でダブってる。英語のハートも、フランス語のクールもそうでしょ。僕も昔から、なんで心臓と心って同じ単語なんだろうって思ってたんだけど、そういう疑問を持つのが不自然なのかなと放置していた。そうしたら、その疑問について思いっきり書いてあるんです。でも、まあ、続きは本書で（笑）。

管 ちょっと気になったところを一つだけ申し上げますと、世界各地の神話の中で、死者の魂というのは例えば鳥や蝶など、生物の形をとることが多い。それが、多田さんによるとキリスト教的寓意では、魂は常に人間の形をしている。精霊を鳩で表すことはあっても、死者の魂が鳥や蝶やミツバチの形をとることはありえない。キリスト教のアントロポモルフィズムは魂の形象にまで及んでいる。

はい、そういうところで本の紹介も無事に終わりました。

まだまだ話は尽きません、が

清岡 あ、すいません。あと△をつけたやつがいくつかあるんですけど...

管 どうぞ。

清岡 私たちと同じくらいの歳に生まれた、ニコルソン・ベイカーの本も面白いですね。ちょっとエロチックなのが好きな人は、『フェルマータ』なんてエロチックですよ。フェルマータって音楽記号で、時間を止められるんですよ。時間を止めて、いろいろしちゃう。後書きで訳者の岸本佐知子さんも書いていますが、この本はフェミニストからものすごい酷評されました。「ふざけんな」とか、「女をモノだと思っているのか」って。まあそれも分かるんですけど、ただ、岸本さんによるとベイカーはその批判も織り込み済みでやってるらしい。

確かに、「時間を止めて裸にしちゃえ」的な場面も結構あるけれど、それだけではなくて時間を止めて雨の中を走っていたら、いつの間にか走り抜けた跡が空洞になってたりする。

なかなかポエティックなんです。

大げさに言うと、ある種の、瞬間の微分の実験。瞬間を止めて、その瞬間を限りなく色んな風に拡大して、解剖して見せるというような試みなんです。エロチックな部分も「一種の微分なのね」って思って読めば、腹も立たないかな。

その岸本さんのエッセイ『気になる部分』も、ものすごく読みやすい。本を読み慣れていない人は、こういう読みやすい本をとっかかりにすると、読む感じが駆動してきますよね。

管 ああ、申し訳ないのですが、そろそろ時間が大変非常になくなってきてまして。

清岡 ああ、もうこんな時間だったの。すいません、すいません。

管 残念ながらこの辺りで、清岡さんはまだまだ今夜はこれから、という感じですけども、お話しはいったん打ち切りにしたいと思います。みなさま、どうもありがとうございました。今夜はぜひ1冊、ここで話に出た本を読んでみてください。

2010年6月26日 ジュンク堂書店池袋本店にて

Copyright (C) 2010 JUNKUDO.Co.,Ltd.ALL rights reserved.